



『21世紀の変革思想へ向けて —環境・農・デジタルの視点から』



尾関周二 著
本の泉社
2021年
四六判 372頁
定価 3,000円（税込）

本書は、これまで、労働とコミュニケーション、環境と共生の思想、「農の思想」などを積極的に展開してきた著者が、21世紀に向けて、それらを有機的に結合して、一つの歴史観として提起したものである。著者の仕事の集大成となっている。

本書は、3部構成である。第I部「環境思想と社会理論の交差」では、「環境正義」や「自然の権利」論などと対比して、人間・自然関係を、若きマルクスの「人間主義と自然主義の統一」や『資本論』の物質代謝論から考察している。第II部では、マルクスの「物質代謝様式」と「共同体論」の2つを根底に据えた歴史観が展開される。未来に向けては、「労農アソシエーション」の視点が重視される。第III部では、「デジタル革命」を媒介にした「農工デジタル社会」の方向で、労働と技術の意味が問いつぶされ、「脱資本主義化」が展望される。意欲的な著作である。

あくまで私の視点からではあるが、本書の特徴的な点にいくつか言及してみたい。

「物質代謝様式」と「共同体論」を、歴史の基底を貫いてきたものとして歴史観の根底に据えることは、大賛成である。そのさい、著者は「物質代謝様式」の近接の概念として、「ホメオスタシス（恒常性）」概念を論じている。あまり考えることのなかった概念であるが、これは重要な指摘ではないか、と思う。マルクスは環境破壊を人間と自然の物質代謝の「攪乱」としてとらえたが、「攪乱」されない場合を、私は「人間と自然の正常な物質代謝」と呼んでいる。正常な物質代謝の必要性は「生命体におけるホメオスタシスの機能」によって基礎づけられるのではないかとみなすことができるからである。

「共同体論」の方も、マウラーの古いドイツの「ゲルマン的共同体」に関する晩年のマルクスのノートや「ザスーリチへの手紙」など、最新の晩年マルクス研究を踏まえて論じられる。どちらも、「農業共同体」をテーマにしたものである。著者は、「農業共同体」のうちに、「小農没落史觀」ではなく、「小農」による「共同体の再生」を読み取っている。国連の「小農の権利宣言」（2018年）をも参照しながら、「アグロエコロジー」と結びついた「小農」の存在意義に注目する。著者が「小農」を評価するのは、「小農」が土地を所有して、物質代謝を再生産する根源的な生産過程である農業に直接かかわっているとみなすからであろう。

本書では、歴史の基底にあるのが「物質代謝様式」であり、「生活共同体」であるというマルクス読解を踏まえて、「脱資本主義化」の方向で未来社会が構想されるが、そのさいの中心になっているのが、「デジタル革命」に媒介された「農工デジタル社会」である。「デジタル革命」が政府・財界の「society 5.0」とは違うことを鮮明に果たす意義が考察される。

「労農アソシエーション」の構想は大変興味深い。紙数の関係で具体的なことに触れる余裕はないが、マルクス読解の関係で一点だけ指摘しておくと、『資本論』の「大工業と農業」を論じた箇所で、マルクスは、将来の生産のあり方として、「工業と農業のより高次の結合・総合」を提起しているが、マルクスによる内容の展開はない。「農の思想」に根ざした「労農アソシエーション」の構想は、このマルクスの問題提起につながりうるようと思われるが、どうであろうか。

いずれにせよ、マルクスの唯物史觀がロシア・マルクス主義の「史的唯物論」のバイアスのもとで解釈されてきた歴史があることを踏まえれば、マルクスの唯物史觀をそれから解き放して、豊かなものとして展開するためにも、著者の歴史観は重要な試みのひとつになるよう思われる。

（岩佐 茂：一橋大学名誉教授、哲学）